

風姿花伝第二、  
物<sup>もの</sup>学<sup>まね</sup>条々  
女

凡<sup>をんな</sup>、女懸<sup>か</sup>かり、若<sup>わか</sup>き為<sup>して</sup>手の  
嗜<sup>たしな</sup>みに似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>ふ事なり。さり  
ながら、これ一大事なり。  
先<sup>まづ</sup>、扮装<sup>したて</sup>見<sup>ぐる</sup>苦<sup>くる</sup>しければ、更<sup>さら</sup>  
に見<sup>み</sup>所<sup>どころ</sup>なし。  
女<sup>によう</sup>御更衣<sup>ごかうい</sup>なんどの似<sup>に</sup>せ事  
は、容<sup>たやす</sup>易<sup>やす</sup>くその御振<sup>ふ</sup>る舞<sup>ま</sup>い

〔口訳〕 大体、女の風姿といふものは、若年の演者の嗜みに似合ふものである。しかしながら、女体の風姿といふものは、中々容易でない。先づ第一に、其のいでたちが見ぐるしい時には、全く見られたものではない。

女御や更衣などの高貴な婦人に扮する事は、容易にさうした上臈の御<sup>ふるまひ</sup>挙動を見る事はないから、これは十分に伺

を見る事無ければ、能々  
伺ふべし。衣、袴の着様、  
総て私ならず、尋べし。

唯世の常の女懸かりは、常  
に見馴るゝ事なれば、実に  
も容易かるべし。たゞ、衣  
小袖の扮装、大方の体、可

ひ尋ねてやらねばならない。衣や袴の  
着様なども、さういふ上臈には昔から  
定まつてゐる方式があるものだから、  
よくよく尋ねなくてはいけない。

世間普通の女の風体は、常に見なれ  
てゐる事だから、それに扮する事は実  
際容易であらう。ただ、衣小袖のいで  
たち、大体の姿など、相当に風趣があ  
ればよい。曲舞や白拍子、又は物狂ひ  
などの女に扮するには、扇でも、かぎ  
しでも、いかにも弱々と、持つか持た

しくとある迄なり。舞ひ

白拍子、又は物狂ひなど

の女懸かり、扇にてもあれ、

かざしにてもあれ（原註..はなのえ

たなんと也）、如何にもく弱々

と、持定めずして持つべし。

衣袴なんどもをも長々と踏み

ぬかわからぬ位に、しなやかに持つが  
良い。着物や袴なども、長々とふくよ  
かに、足のかくれる程に着け、腰膝は  
かがまぬやうに、そして身体全体はし  
なやかでなくてはならない。顔の持ち  
やうは、仰向き加減であるとか容貌が  
悪く見え、又俯向いては、後姿が見に  
くい。又頸持ちの工合が強いと女らし  
く見えない。又なるだけ袖の長い着物  
を着るやうにして、手先をも見せない  
やうにしなくてはいけない。

含<sup>く</sup>みて、腰<sup>こし</sup>膝<sup>ひざ</sup>は直<sup>す</sup>ぐに、身<sup>み</sup>は  
嫋<sup>たを</sup>やかなるべし。貌<sup>かほ</sup>の持<sup>も</sup>ち  
様<sup>やう</sup>、仰<sup>あを</sup>げば見<sup>み</sup>目<sup>め</sup>悪<sup>わる</sup>く見<sup>み</sup>ゆ、  
俯<sup>うつ</sup>けば後<sup>うし</sup>ろ姿<sup>すがた</sup>悪<sup>わる</sup>し。さて、  
首<sup>くび</sup>持<sup>も</sup>ちを強<sup>つよ</sup>く持<sup>も</sup>てば、女<sup>に</sup>  
似<sup>に</sup>ず、如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にもく袖<sup>そで</sup>の長<sup>なが</sup>  
き物<sup>もの</sup>を着<sup>き</sup>て、手<sup>て</sup>先<sup>さき</sup>をも見<sup>み</sup>す

べからず。

されば、扮<sup>したて</sup>装<sup>たしな</sup>を嗜<sup>たしな</sup>めとは、  
懸<sup>か</sup>かりを良<sup>よ</sup>く見<sup>み</sup>せむと也<sup>や</sup>。  
いづれの物<sup>もの</sup>真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>なりとも、  
扮<sup>したて</sup>装<sup>わろ</sup>悪<sup>わる</sup>くては能<sup>よ</sup>かるべきか  
なれども、殊<sup>こと</sup>更<sup>さら</sup>、女<sup>に</sup>懸<sup>か</sup>かり、  
扮<sup>したて</sup>装<sup>わろ</sup>を以<sup>も</sup>て本<sup>ほん</sup>とす。

かやうなわけで、いでたちを十分に  
嗜<sup>たしな</sup>み研究<sup>けんきゅう</sup>せよといふのは、結局その風  
姿<sup>ふうさ</sup>風情<sup>ふうせい</sup>を良<sup>よ</sup>く見<sup>み</sup>せようが為<sup>ため</sup>である。如  
何<sup>いかん</sup>なる物<sup>もの</sup>真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>でも、いでたちが悪<sup>わる</sup>くて  
は良<sup>よ</sup>い筈<sup>はず</sup>はないのだが、特別<sup>とくべつ</sup>に女<sup>に</sup>体<sup>てい</sup>の  
風<sup>ふう</sup>姿<sup>さ</sup>は、いでたちといふことを以<sup>も</sup>て根  
本<sup>もと</sup>とするものである。

この段より以下は、物真似に關しての細説で、先づ女体物真似の注意をのべて居る。物真似といふ内容には、二方面が考へられる。一は身体の扮装、身のこなしなどで、その者に似せること。二は、その者の行動動作を真似ることである。ここでは、主として第一について論じて居るが、物真似の根本は勿論この第一である。花鏡に、「先能其物成、後能其態似」を説いて居る所と、合せ見るべきであらう。

女体に於ては、「女らしく出でたつ」ことが第一要件である。それには現実の女体の種々相を十分に研究的に觀察し知悉しなければならぬ。又、自分等が見ることの出来ぬ高貴な女性については、それを聞き尋ね、服装等も故実に合するやうにつとむべきであると教へてゐる。

其他女体の特色として、持ち物の持ち定めやうの強からぬこと、手先や足を見せぬこと、顔の持ちやう、頸の工合、身体のすらりとしたしなやかさなどへの注意を見ると、女らしく出で立つ事に対して、如何に細心の注意をはらつて居るかがうかがはれると思ふ。更に、これを後

年の二曲三体絵図に於ける女体の心得と比較して見ると、「女体、体心捨力。心を体にして、力を捨つるあてがひ、よくよく心得すべし。物真似の第一大事是にあり。幽玄の根本風とも申すべきなり。返す返す心体を忘るべからず」とあつて、花伝書が、外面的扮装姿体を中心として居るに比べて、女体風姿の根本的な心得をのべて居る事を見る。両者合せ見る時に、世阿弥時代の女体風姿への要求が那边にあつたかを知り得ると思ふ。